

六花



俳句雑誌りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

5



山田六甲

泥舟

しん
親

5月26日文鳥麦秋忌

父より は 六つ 年上 麦の 秋
辞世

泥舟のすーいすーいと春の夢

普通の生活

春月を眉毛あかるく歩ましむ
蒲公英に耳かき忘れありにけり
春の風邪もらひしと嘘八百を

桜山二句

輪切りなる春大根のうすみどり
露味噌に背山の竹の鳴る夜かな

四月一日・淑桜忌・三鬼忌・六甲結婚記念日

亀鳴くや眠くなるまで本読んで

生田神社・曲水の宴五句

曲水や人の背中のおもしろく
流觴やさらさらさらと筆はこび
曲水や笙にいくたの神招き
曲水や水占札のご神饌
夕風に曲水の坐を還しけり

黄泉比良坂

乗込の始まつてをりあさぼらけ
黄泉に吹く風のかたちぞ雪柳
揚雲雀牛は勝手にあるきけり
陽^{かがろ}炎^うや前世は筆と占ひに

出雲八重垣神社

生け垣へ二つのせおく落椿

春水にひざまづきたるをみなかな

明石城公園

胸で押す水を豊かに春の鴨
春の鴨すつくと立ちて瞬きぬ
春水の一枚磐を渡りけり
春濁り老いや若きや鯉の顔
猪のごとくに鮒の乗込める
ふと水に老人臭や春闌けて
春闌けて手帳を持たずペン持たず

夙川

夕桜大道芸人炎吐く
花冷やうどんすするに箸を割る
綿菓子に幼な佐保姫駄々こねし

腰 繩 の 印 半 纏 桜 守
雪 吊 の 繩 は 鋼 を し の ぎ け り
割 箸 の 歪 に 割 れ て 花 菜 漬

太山寺裏

春 雨 に 不 動 明 王 火 を 背 負 ふ
山 藤 へ 一 本 道 を 閉 ざ し あ り
川 音 に 夕 鶯 の ね り こ ま る
山 藤 を 確 か め に 来 し 咲 き を ら ず
道 閉 ざ す 金 網 越 し の 春 落 葉
虎 杖 を 手 に 挨 拶 の す れ 違 ふ
鼻 痒 し 未 完 の ま ま の 春 の 夢

悼・岡本由美子さん

つ ひ に 手 を 伸 ば し 玉 ひ し 花 の 雲

雪 卿 集

七つ星

梶浦玲良子

千枚田きのふのままの頬被り
なやらひの闇こがしゆく七つ星
犬走りはなれる気なし六つの花
冬木の芽哭かせて月の国ざかひ
短日の雲の座りし五位の河

梅ほつえ

笹村政子

伐採の枝に木の芽のふくらめり
梅ほつえ挨拶ほどにゆれてをり
梅祭串の焦げたる味噌団子
差し交はす枝のもつれず梅百花
水音を残し梅園暮れそむる

雪 卿 集

初泣き

志方章子

花びらの開ききつたる寒さかな
いぬふぐり三脚ぐいと差し込まる
冬天を突き宝輪のかがやける
桜の芽冬空しかと掴みけり
初泣きやどこへゆきしか兄貴ぶり

寒

永田万年青

流雲光らせ出づる寒の月
寒風に真知子巻きする漠かな
外に出て耳から走る寒さかな
雪解水溝底透けて速かりき
寒風に涙流るるバイクかな

雪 卿 集

薄 氷

松本文一郎

薄氷や老舗旅館の手水鉢
天狼や仮設住宅黒々と
前人の跡を跳び行く雪の道
雪搔やメーデー賛歌口ずさみ
初午の精進料理験直し

盆の梅

市川伊團次

鬼やらひ一人居の爺豆を撒く
息白し白馬の生まるるが如く
海よりの風の匂うて実朝忌
藪柑子倉庫の電気来ないまま
水やりの土こぼしけり盆の梅

鳴きやめば餅にかえりしうぐいす餅 貝森光洋

なきやめばもちにかえりしうぐいすもち かいもりこうよう

最後には魂決める牛角力

人間を浮かしているなり春の服

春日傘乙女に淡き翳生まれ

鳴きやめば餅にかえりしうぐいす餅

鳥帰るあたかも人生壮年期

その場に即応して気の利いたことをいえる才氣「ほととぎすなきつるかたを眺むればただ有明の月ぞ残れる」を即興で俳諧に読み直し応えた滝瓢水の「さてはあの月が鳴いたかほととぎす」の句と張り合える機知を發揮してうぐいす餅を詠んだ貝森節。秀吉の春の野点に出されたうぐいす餅を連想。先ほどまで鳴いていたのはこの餅だったのか。音色を十分楽しませてもらった上に、この餅を食べてもいいということなるだろう。声のつやといい、色といい、おだやかな春の気分に含まれながら、淡く柔らかいみどりいろの餅をひとつまみしようとしたら「ホウホケキヨ」と再び鳴いた。「おつ、おみやあさん、まだ食べちゃあいいけないかえ」「あい、茶々が来ておりません」

紅梅に潤みし眼もどしけり

藤生不二男

こぼれ哭く犬に目覚めし冬の月

末黒野や焦げたる石に鳥の糞まり

鯉の背の分けゆく水の温みけり

紅梅に潤みし眼もどしけり

春耕やいづくかに聞く水の音

こぼれにうるみしまなこもどしけり ふじおふじお

紅梅をじつと見つめていて目が潤んできた。「紅梅」は濃い桃色、襲の色目でもある。源氏物語五十四帖の巻名でもあり、薰大将柏木の弟、按察大納言の子女たちの身の上と、薰と匂宮とのかかわりを描く。それらにまで連想が及んだのであるうか。目ばかりでなく勿論感情も潤んでくる。冬の乾いていた気持ちに紅梅が潤いを与えてくれた。紅梅に心を奪われ満ち足りた目を見上げる前の状態に戻したのである。戻したということなのだ。紅梅は濃い襲の色から淡い紅梅まであるが、白梅とはちがった趣があるけれど濃い紅梅だからこそこか。

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

出口 誠

去年の実を残し臘梅咲きにけり
塾の子の帰り待ち居る寒夜かな
出つぱりて円にはならぬ蜜柑かな
臘梅を見てゐる我を鳥が見る
去年の葉も残し臘梅満開す

升田ヤス子

操車場寒の水もて窓拭ける
雪搔の音を嗚咽と思ひけり
雪しづる白猫の飛び降りしかに
兄の手を舐める嬰児やぶこ日脚伸ぶ
恋猫に他人のやうな目で見らる

蛩雪譚

六甲選

二十六年三月号選後に

なやらひの闇こがしゆく七つ星

梶浦玲良子

なやらひは追儼のことで鬼遣らひとも。追儼はもと中国から伝わって、大晦日に行う宮中の行事であったが、しだしに神社寺院や上流階級に広がってしだいに二月の節に行われるようになった（森澄雄）という。現代では神社の行事や二月三日に各家庭でも鬼やらひとして生活に溶け込んでいる行事のひとつ。七つ星とは北斗七星で北西の空に春先夕刻から上ってくる。個人的印象としては急に現れてきて、ああ春だ、という感慨を持つ。

文字通り七つの星が組む柄杓のような星座で、子どもにもはつきりと星座を意識できる。七星とも北斗おぐま座とも。中国では九星ととらえていたらしく。詳しくはここに書かない。なお七星の尾から数えて6番7番目の延長線上に北極星があるので、北極星を見つ

ける目安にもなる。オリオンが冬の星座なら北斗七星は春の星座として季語になってもいいのではないかと思ふ。さて句に話をもどすと、この七星は鬼遣らいで投げた豆の火の玉が天空高く飛んで行って七星になったのかもしれない。ゆえに闇を焦がしたのであろう。闇を焦がすほどに明るいというのかも。しかし無理に解釈はしないほうがいい。



六花集

池喉ほ冬
 め凍元うの
 ばてぼ鷺
 てをう耀
 入小熱のの
 日石く胸終
 大に通青る
 き佇くを待
 くるぬらち
 鳩夕れみ廣
 の千蜺けた畑
 池鳥汁りる育子

ジ外黒潮着
 ヤ套襟のぶ
 ケのに香く
 ツ内残をれ
 トにりふて
 を鳩しり己
 枕躡切の
 と飼ちるの
 しひやか本
 たみんー性
 りるちづ見平
 船ごや雪失居
 のとん列車ふ
 旅しこ車ふ子

残雪冴冴笹
 雪解返返鳴
 もけるるや
 汗の寒余
 ば滴のは寒
 むの極を
 程のみ前生
 の音をやき
 日や春らる
 和光と後者菊
 かふ知や同谷
 なるるら士潔